

# 「なんと」の意味・用法の拡張

## ——副詞と感動詞のあいだ——

姚 瑶

Expansion of the Meaning and Usage of "Nanto": Between Adverb and Interjection

Yao YAO

### Abstract

This paper examines the uses of "nanto" in modern Japanese, classifying them into four types: the "independent use" as an interjection, the "interrogative use," the "attribute-modifying use," and the "event-modifying use" as an adverb.

The core meaning of "nanto" is the "difficulty in accepting information" arising from unexpectedness, which can be inferred from its original interrogative form "nani + to."

Among the adverbial uses, the interrogative use of "nanto" is not a lexical adverb, but indicates a state in which the speaker is unable to process or verbalize the situation, as it is indefinite or unknown. In its attribute-modifying use, "nanto" modifies adjectives and adjectival nouns (*na*-adjectives), expressing "difficulty in degree assessment," which means the degree of the attribute cannot be assessed by a degree scale. It emphasizes the unexpectedness by exclamatorily presenting the attribute's degree as so high as to be affectively hard to accept.

Similarly, when "nanto" modifies an event, it emphasizes the sense of unexpectedness because of the event's difficulty of acceptance for the speaker. This characteristic is also shared with the independent use of "nanto" as an interjection, which was examined earlier.

Furthermore, when the event-modifying "nanto" detaches from the sentence and is used alone at the beginning of an utterance, or when it extends into an other-directed quasi-exclamatory use, its interjectional nature becomes even stronger. Such developments suggest that "nanto" is a word that exhibits continuity across parts of speech, both in its syntactic characteristics and its pragmatic functions.

## 1. はじめに

本稿では「なんと」を取り上げる。例えば、

(1) (会計時に財布を忘れたことに気づき) {なんと/あっ/わあ} !

では、「なんと」は「あっ」、「わあ」と同じく、話者の意外な出来事に対する即時の驚きなどの感情を言語化する独立した発話であり、感動詞として捉えられる。しかし、同じく話者の驚きを表しているが、(2)の「なんと」と「あっ」、「わあ」とでは、やや性質が異なるように思われる。

(2) {なんと/あっ/わあ}, 彼は 100 点を取った !

「あっ」、「わあ」は(2)のように文と連動する場合では文頭にしか出現しない。一方、「なんと」は、文頭に出現するのはもちろん、

(3) 彼は {なんと/\*あっ/\*わあ} 100 点を取った !

のように文中で用いられることが多い。ここでの「なんと」は「彼が 100 点を取った」という事態全体に対する

る驚きであると同時に、特に「100点」に焦点を当ててそれが予想外であるという評価的な側面もある。このように、「なんと」は単純に他の感動詞と同じとは言えない側面がある。

また、(4)のように話し手自身の驚きに留まらず、聞き手の興味や関心を引き起こす役割を担う「なんと」も観察できる。

(4) 司会：「本日はなんと！俳優の○○さんに来ていただきました！」

これに関連して、意外性を示す副詞で言えば、「意外なことに」「意外にも」が挙げられ、

(5) 彼は{意外なことに/意外にも}100点を取った。

のように言える。それに対し、(6)に示すように「なんと」は自然に使えるが、「意外なことに」「意外にも」は許容度が低い場合がある。

(6) 「私は{なんと/??意外なことに/??意外にも}、10月に結婚するよ」

さらに、「なんと」は感嘆文においても頻繁に用いられる。例えば、(7)では、「なんと」は「花の美しい程度の甚だしさ」を感嘆的に修飾し、その意味で程度副詞的な側面を持っていると言える。一方、「とても」や「非常に」なども程度が高いことを表す副詞であるが、感嘆文に用いることはできない。この違いは「なんと」が単なる程度修飾以上の独自の意味機能や構文制約を持っていることを示唆する。

(7) {なんと/\*とても/\*非常に}美しい花だろう。

そこで本研究では「なんと」の意味機能に着目し、その独自性を明らかにすることを目的とする。「なんと」の使用実態、他の副詞や感動詞との相違点を考察することにより、その中核的な意味機能を解明するとともに、「なんと」が担う役割と日本語文法における位置づけを再評価し、感動詞と副詞の関係に新たな視点を提供することを目指す。

## 2. 先行研究

### 2.1 「なんと」について

現代語における「なんと」の意味用法に関する先行研究は極めて少なく、詳細な分析はほとんど見られない。以下では、その基本的な用法を確認するため、『日本国語大辞典 第二版』<sup>(1)</sup>における「なんと」の記述を示す。

#### 【一】〔副〕（「なにと」の変化）

(1) 事物・事態の不明・不定なさまを表わす。どのように。どんなふうに。なんて。

\*平家物語〔13C前〕二・教訓状「縦人なんと申共、七代までは此一門をば争（いかで）か捨させ給ふべき」

(2) 動機・理由などへの納得・容認しがたい気持を表わす。どうして（…であろうか）。なぜ（…なのか）。

\*淨瑠璃・平家女護島〔1719〕三「道を立義を立誠をつくす侍に、何と刃が当られう」

(3) 相手の感情や反応をさぐる気持を表わす。どんなものか。

\*雲形本狂言・萩大名〔室町末～近世初〕「その上お暇まで下されたが、何（ナン）と嬉しうは思はぬか」

(4) 名状しがたいほど程度のはなはだしいことを驚き、あきれる気持を表わす。まことに。

\*虎明本狂言・文藏〔室町末～近世初〕「『なんとそれをくだされた』『中々』」

#### 【二】〔感動〕

相手の同意を期待しつつ呼びかけことば。どうだな。

\*淨瑠璃・心中天の網島〔1720〕下「なんと伝兵衛、町人は爰が心易い」

簡単にまとめれば、『日本国語大辞典 第二版』において、「なんと」は副詞用法と感動詞用法に大別されている。副詞としては、①様態の不明、②理由への納得困難、③相手の感情の探り、④驚き・あきれの感情表現の4用法が示されている。一方、感動詞としては、⑤相手の同意を促す呼びかけの用法が挙げられている。

感動詞としての同意を促す用法について、深津（2018）は（8）のような例を挙げながら、「なんと」のこ

(1) 紙幅の都合により、最も古い用例のみ掲載し、他の例文は省略する。

の用法を「働きかけ用法」と称している。その成立は発話そのものから疑問の意味が後退し、「行為指示・行為拘束」という語用論的意味が前面化した結果であると指摘している（p52-p53）。ただし「呼びかけ」の「なんと」は現代語ではほとんど使われていないように思われる。

(8) 「何とそれに付て一首あそばされぬか」と所望ありければ…

（諸国落首咄，13 ウ/1698）（深津 2018, 例(13)を引用）

一方、『日本国語大辞典 第二版』では扱われていないが、「なんと、まあ」のように話し手の驚きや感心を即時的に表す用法の「なんと」は、現代語において一般的に用いられており、『新明解国語辞典 第六版』や『大辞林 第二版』などの他の国語辞典にも記載が見られる。このような「なんと」の用法について、深津（2018: 54）は注で働きかけ用法の「なんと」の感動詞化とは関係しないとしつつも、「驚き」の用法は問い合わせ用法に由来すると述べている。また問い合わせ用法の「なんと」について、深津（2020: 7）では、近世初期の資料において発言動詞を伴わない用例も確認されるものの、疑問詞としての用法にとどまる見解を示している。すなわち、近世初期の「なんと」はまだ驚きの感動詞として独立していない段階にあると考えられる。こうした歴史的な研究を踏まえ、本研究では現代語「なんと」の使用実態を明らかにすることを試みる。

さらに、副詞の用法について前節に提示した（6）「私はなんと10月に結婚するよ」のような「なんと」については、既存の国語辞典における語義記述では十分に説明しきれない。本研究では、こうした話し手自身の驚きを表すのではなく、話し手にとっての既知情報を相手に知らせる際、その意外性を相手に強調する、いわゆる対他的な役割を果たす「なんと」についても議論を行いたい。

## 2.2 「なんと」による感嘆文について

「なんと」という語自体の研究はほとんどないが、「なんと～だろう！」による感嘆文に対する研究はある。尾上（1986, 1988）、山口（1990）、阪倉（1993）などではこのような文を話し手の情意を表現するものとし、その情意性を認める一方、文の種類としては疑問文、あるいは疑問周辺にあるものとしている。それに対し、大鹿（1989:81）は「なんと」形式による文を感嘆文と位置づけ、「なんと・なんて・なんという…」は「本来の品詞的性質から離れて感動文専用の形式ともいえるほどになったもの」と述べている。また安達（2002: 115）は「なんと」による感嘆文について、「文末を名詞化することによって感嘆の気持ちを表現する」と同時に、「だろう（か）」や「だ」、あるいは「か」を付加することによって文末に述語が分化し、命題とモダリティの区別が構造化される」と指摘している。

大鹿（1988, 1989）、安達（2002）などの研究を受け、笹井（2006:28）は「なんと」型感嘆文の形式的類型をさらに整理し、文末に「だろう/か/だ」を持たず名詞か体言資格の語で終止する文も多く観察されると提示している。また「なんと」型感嘆文は「なんと」により感動文の本質的な意味である「程度の甚だしさ」を形的に明示し、常に感動文として理解されると述べている。しかし、「なんと」が表示する「感動」のメカニズムについては必ずしも明らかにはなっていない。

以下本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の用例と作例を用い、「なんと」の意味機能を整理したい。その上で対他的用法など語の情意的意味の特異な在り方についても検討したい。

## 3. BCCWJによる「なんと」の用例調査

### 3.1 調査対象と方法

本調査では、現代語における「なんと」の用法を把握するため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（中納言 2.7.3 データバージョン、形態論情報 2021.03、分類語彙表情報 2025.03）（以下 BCCWJ）を用いて検索を行った。<sup>(2)</sup>

BCCWJを調査資料として採用した理由は、以下の2点に整理できる。第一に、現行のコーパスの中で「なんと」の収録例が最も多く、量的分析に十分なデータが確保できる。<sup>(3)</sup> 第二に、BCCWJは書籍、雑誌、新聞、ブログなど多様なジャンルを網羅しており、会話文も豊富に含まれるので、話し言葉的な表現の抽出にも有効であると考えられる。

その結果、語彙素が「何と」で品詞が「副詞」とされる用例が計 3669 例抽出された。こうして得られた用例を検討するにあたり、データが多大であるため、「レジスター」別に用例数順で並べ、最も用例が多い「図書館・書籍」(1121 例) と「特定目的・ブログ」(961 例) から Excel の「ランダム関数」を使ってそれぞれ 500 例を抽出し、計 1000 例を用例の計量及び引用の対象とした。

### 3.2 調査結果

「なんと」の用法は、独立用法（感動詞の用法）と修飾的機能を有する副詞的修飾の用法に分類できる。後者は後続する述語の類型により、さらに「疑問」、「属性修飾」、「事態修飾」という三種類に分類できる。基本的な用法の分布は表 1 の通りである。なお、先に言及したように、同意を促す用法の「なんと」は現代語ではほとんど使われておらず、今回の調査にも出現しなかった。

以下、「独立用法」、「疑問」、「属性修飾」、「事態修飾」の例を挙げる。

(11) 「……わたしの家内は裕福な一族の娘です」「なんと、たいしたものだ。」

(実著者不明／飯豊道男 (訳) 『世界の民話』 BCCWJ)

(12) ナント表現したらいいのでしょうか…不愉快な 1 日でした。 (Yahoo! ブログ, BCCWJ)

(13) 年中歩きまわって花を求める日本に比べれば、ここインドネシアはなんと豊かなことだろう。

(東田直彦 『借金国の経済学』 BCCWJ)

(14) 朝起きてケータイを見たら、なんと、ケータイのカメラのレンズカバーが原因はよくわかりません  
が深い傷が入っていました。 (Yahoo! ブログ, BCCWJ)

(11) のような「なんと」はいわゆる話者の驚きをそのまま表現する感動詞として機能している。ここで「独立用法」という呼称を用いるのは、「なんと」の用法を、他の語句を修飾する副詞的用法と対照的に位置づけ、他の文節と関係しないという構文的独立性を明示するためである。本稿の調査ではこの独立用法の「なんと」の出現頻度は 1.8% (18 例) と低かった。また、その用例はすべて会話文に限定され、一方的な情報伝達を主とするブログには用例がさらに少なかった。このことから感動詞として独立使用される「なんと」は話し言葉

表 1 「なんと」の各用法とその出現回数

	特定目的・ブログ	図書館・書籍	合計
独立用法	3	15	18
疑問	20	26	46
属性修飾	33	127	160
事態修飾	443	324	767
除外 <sup>(4)</sup>	1	8	9
合計	500	500	1000

(2) BCCWJ の調査にあたって、表記の多様性や品詞分類のゆれを考慮し、長単位検索で「語彙素読み」が「ナント」の用例 (3975 例) をすべて抽出し、「名詞」の「ナント」、「南都」などを除外した。その結果、「副詞」に分類される語彙素「何と」(3669 例) と「助詞 - 副助詞」に分類される「なんと」(187 例) が観察できた。感動詞に分類されるものはなかった。

なお、(9) (10) に示すように、「助詞 - 副助詞」とされるものの中、BCCWJ では「副詞」と分類すべきものが混在しており、分析に適さないため、本調査では「副詞」と分類されている「何と」のみを取り上げた。

(9) 「どちらがいいですか?」「実際両方持ってるわけじゃないのでなんともいえませんが。」 (Yahoo! 知恵袋, BCCWJ)

(10) 浜松町から羽田空港に向かうモノレールが、なななんと、ポケモンモノレールでしたよ! (Yahoo! ブログ, BCCWJ)

(3) 予備調査として『現代日本語日常会話コーパス』(中納言 2.7.2 データバージョン 2023.03) で同じ方法で検索を行ったが、「なんと」の用例は 11 例しかなかった。また、『日本語話し言葉コーパス』(中納言 2.7.2 データバージョン 2018.01) では長単位検索に対応しないため、短単位検索で語彙素「何」+「と」で検索し、「何とか」「何となく」を除いた結果、「なんと」の用例は 548 例ある。

(4) 「なんとなしに」、「なんとなれば」、「なんとか」が見られたので除外した。

的性質が強いことが示唆される。しかしながら『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語日常会話コーパス』で独立用法の「なんと」を検索したところ、前者は0例、後者は1例しか確認されなかった。すなわち、「なんと」は感動詞的に用いられることがあるものの、「あっ」「えっ」などの常用の感動詞に比べればその用例は著しく少なく、感動詞としての定着度が必ずしも高くないことを示していると考えられる。

(12) のような疑問の「なんと」は「どのように」、「どうやって」を意味し、物事の方法などを問う際に用いられる。この用法は「ブログ」(20例)と「書籍」(26例)で大差が見られなかった。この用法は「疑問詞+引用」としても把握できるものであり、考察の中心からは除外する(後述)。(13)の「なんと」は「花の豊かさ」を修飾する「属性修飾」の一例で、この用法は全体の16%を占めている。その中、属性修飾の「なんと」は「書籍」での用例が「ブログ」の約4倍である。これは「書籍」では文学的、解説的な内容が多く、物事の性質や特徴を詳細に描写することが重視されるためであろう。(14)のように事態修飾の「なんと」は文全体の事態を驚くべきものとして評価し、強調する機能を果たす。この用法は「ブログ」(88.6%)、「書籍」(64.8%)のどちらでも頻繁に用いられている。以下、各用法を見ていく。

#### 4. 感動詞の「なんと」

「なんと」は元々疑問の「なに」と引用の「と」からなる「なにと」の音変化である。実質的な意味は非常に希薄である一方、情意性が高いため、意味論・文法論からの検討だけでは「なんと」の全貌を把握することが難しい。

田窪・金水(1997:257-258)は言語表現には話し手の心内に貯蔵されている情報データのほか、話し手の心的・操作に関わるものがあると指摘している。後者は、情報データそのものには関わらないが、話し手の心内でおこなう様々な情報データの処理操作(例えば入出力・登録・検索・計算・編集)に関わる。その例として感動詞、ある種の副詞などの語類が挙げられ、これらの語類は心的・操作に関わるものと考えることができるとして示唆している。本稿で扱う「なんと」はまさにこうした表現の一つであり、その心的・操作としての側面に着目する必要がある。

##### 4.1 他の感動詞との異同

「なんと」は、感動詞「あっ」、「わあ」と同じく、話者が感動したり、驚いたりした際に発する語とされているが、「あっ」、「わあ」と比べて独立して使われることが少ない。BCCWJにおいて感動詞「あっ」の用例は9685件、「わあ」の用例は1673件あるのに対し、「なんと」はBCCWJの語彙素分類で感動詞として品詞付与されるものが見られない。また(11)のように「なんと」が明らかに感動詞的な機能を果たしている用例もBCCWJでは「副詞」として処理されている。これは、「なんと」が感動詞として十分に定着しておらず、副詞と感動詞の中間的性質をもつ語であるという語的特性を反映した結果と捉えることができる。

独立用法の「なんと」の使用は「あっ」、「わあ」と同じく、新情報との遭遇を前提とする<sup>(5)</sup>。(15)では、「プレゼントをもらった」という予想外の新しい情報に対して「あっ」、「わあ」と「なんと」のいずれも使える。しかし仮に話者が事前にその情報を把握していたとすれば、演技的に相手に驚きの感情を示すのでない限り、「なんと」の使用は考えにくい。例えば学級お誕生会で順番にプレゼントを受け取るような場合は「なんと」を使うと意外感を強調して少しあざとらしい印象があるようにも思われる。

(15) 花子「はい、太郎くんへのプレゼントだよ」

太郎「{あっ/わあ/?なんと}、ありがとう！」

同じく新情報との遭遇でも、「あっ」「わあ」は、話者が直接的に経験・遭遇した事態に対する驚きを示す傾向が強い。一方、「なんと」は元の疑問の語形から由来する「なんということだ」といった問い合わせの意味が含まれ、聞いた情報に対する認知的な判断を伴う驚きを示す。

(11) (前掲)「……わたしの家内は裕福な一族の娘です」

(5) 森山(2015)、姚(2021)などを参照。

「{なんと/(?あつ)/(?わあ)}、たいしたものだ。」

(実著者不明／飯豊道男 (訳) 『世界の民話』BCCWJ)

(11) では、「わたしの家内は裕福な一族の娘です」という情報は話し手の直接経験ではなく、聞き手の発話によって導入されたものであるため、「あ」「わあ」の使用はやや不自然である。それに対し、「なんと」は、提示された情報が話し手にとって「通常ではあり得ない」「想定しがたい」といった予想外の事態であることを示唆する語である。つまり、「なんと」は新しい情報に直面した際、話者がその情報を既知情報との照合を経て、既知情報との関連性が低い、つまり予想外と判断したときに生じる認知的判断に基づく驚きの反応として現れる。この驚きは、形態的に「何」という疑問詞があるということと、それに伴って、単なる感情の表出ではなく、情報処理過程に基づく認知的な判断に根差している。

これに関連して、問い合わせの機能を有する感動詞として「えっ」が挙げられるが、

(16) {えっ/\*なんと}、今なんて言った/それってどういう意味？

のように、「えっ」は相手の発話を聞き取れなかった、あるいはその意味を理解できなかった場合に用いることができ、既知情報との照合を必要条件としないのに対し、「なんと」は新情報と既知情報との照合を要求する。

特に、(17) のように痛みなどの感覚をそのまま言語化する場合、「あつ」「わあ」は未分化な反応の発露を表すが、「なんと」は不自然である。「なんと」は情報内容を既知情報との照合を経て捉えるプロセスにあることを表すからである。

(17) {あつ/わあ/??なんと}、痛っ！

このように、「あつ」、「わあ」のように接した新情報を直接に受け入れるのではなく、「なんと」は、既知情報と関連付けて新情報を受け入れつつも直ちには受け入れ難いという、いわば「情報受容困難」を示す標識だと言える。

## 4.2 構文的位置と品詞判断のゆれ

前掲した例 (2) のように、

(2) (再掲) {なんと/あつ/わあ}、彼は 100 点を取った！

成績表を見て、「彼は 100 点を取った」という情報に触れた際、話者の即時的な驚きを表すのに「あつ」、「わあ」のほか、「なんと」を発することがある。この場合の「なんと」は、発話の冒頭に独立して現れ、話者の内的反応をそのまま表出する点において、感動詞としての機能を果たしていると考えられる。しかし、「なんと」は次のように文中に位置することもある。「100 点を取った」という事態を、いわば直ちには受け入れがたいものとして評価的に修飾する副詞的用法である。

(3) (再掲) 彼は {なんと/\*あつ/\*わあ} 100 点を取った！

この用法の場合、次のように感嘆符を使用することもできるが、出現位置としては文頭とは言えず、「あつ」や「わあ」との置換もできない。つまり、この「なんと」は感嘆の情意を表すという点において、感動詞の用法と共通しているが、構文上では感動詞のように一語で文相当の機能を果たすことができない。

(18) 彼は、{なんと/\*あつ/\*わあ} !!! 100 点を取った！

このように、文と共に起する「なんと」は、文頭に位置する場合には感動詞的機能と副詞的機能の両義性を持ちうるが、文中に位置する場合には構文的依存関係が明確となり、副詞として解釈される。したがって、「なんと」は統語的位置に応じて品詞性が揺れ動く、中間的性質を有する語であると言える。

さらに、語用論的側面に注目すると、感動詞としての「なんと」は話し手の新情報に対する驚きの意を即時に表すもので、基本的に非対他的であるが、事態内容を修飾する「なんと」は対他的に用いられることが多い（後述）。

## 5. 副詞的用法の「なんと」

### 5.1 疑問の「なんと」

副詞的用法の「なんと」とは、後続する述語に係る表現である。このうち、

(19) {なんと/なんて}言えば/返事したら/呼んだらいいでしょう。

のような例は、動詞が後続するが、完全に副詞としての「なんと」とは言えない。「言う」、「告げる」、「書く」、「主張する」などの言語活動動詞が後続する場合にのみ使われ、疑問の「なに (何)」に引用の格助詞が付いた形と言える。この形式は本稿の考察の中心ではないが、「なにと」で言い換えにくい点と、述語を後続させる点で、大きく副詞的用法として位置付けられる。意味的にも疑問の意味が残存している。ただし、「なんという (なんて)」などの用法にも関連して、疑問としての要素が属性の受け入れがたさを焦点化することにつながることは重要である（後述）。

## 5.2 属性を修飾する「なんと」

「属性修飾」の「なんと」は、事物について何らかの属性が容易に受け入れられないほどのものであるということを評価・修飾する用法である。その点で、その程度性の甚だしさを強調する機能を果たす。一般的には形容詞などの程度性のある属性を修飾し、主に感嘆文に用いられる。疑問の「なんと」と異なり、(20) (21)のように疑問文と共に起きず、何らかの属性を修飾する副詞として機能する。

(20) {\*なんと/どれほど}美しい花ですか。

(21) なんと美しい花だろう！

(21) は「なんと」型の感嘆文である。大鹿（1989）などにも指摘されたようにすでに疑問の機能を失っている。形容詞や形容動詞を修飾する場合、「なんと」は「ある物事の属性をいかに説明、表現すればよいかわからないほどに程度性が高いこと」を意味し、属性概念の程度性が高いことを強調することにより、情意的に感嘆の意を表す。

この「なんと」はある属性の程度が高すぎて容易に程度スケールに位置付けられない、言語化できないという「程度把握困難」の標識と捉えられ、「情報受容困難」の一形態と見なすことができる。「なんと」型感嘆文はもはや疑問文ではないのだが、通常の程度表現でもない。「なんと」が「だろう」「だろうか」などの「疑い」というべき文末と共に起することには注意しておきたい。このことは文末が過去テンス<sup>(6)</sup>や丁寧な断定<sup>(7)</sup>などにおいて使われないことも関連している。副詞としての「なんと」は元の疑問としての意味を残存させた、発話現場での情動の言語的表現なのである。この点は次のように「とても」のような程度副詞とは異なっている。

(22) 「大」の一字は、文字通り {なんと/(\*とても)} 大きい姿をしていることだろうか。」

(鈴木史樓『書のたのしみかた』BCCWJ)

また、次のように美しいという属性を持つ何かの事物が目の前に、あるいは今心的領域の中に活性化、顕在化しているのであれば、事物を明示しなくても次のように平叙文としての文末で使うことができる。

(23) {なんと/とても}美しい！

のことと関連して、先に除外した「疑問詞+と」としての「なんと」に連続する用法としての「なんという+名詞」にも注意しておきたい。

(24) 馬鹿野郎め。{なんという/(なんて)/\*(とても)}奴だ。あれだけ言つてたのにまたしてもここへ電話してきやがった。

(筒井康隆『文学部唯野教授』BCCWJ)

(24) は名詞「奴」の属性は明示されていないが、その属性が「言葉で表現できないくらい甚だしい程度性を持っている」ことを暗示し、疑問としての要素が属性の受け入れがたさを焦点化することにつながっている。

これに連続して、(25) の「悲劇」のように属性概念が内含される名詞に対する「なんて」による修飾の例も見られる。これも「なんと」という副詞ではないが「なんと」型の感嘆文に連続するものとして位置づけられる。

(25) {なんて/なんという/\*なんと}悲劇だ。

(6) 安達（2002：116）では「\*あの男、なんて強いんだった！」を挙げている。

(7) \*なんと美しい花です。

Cf. {なんて/なんという/なんと} 悲しいことだ。

ここで程度副詞の「とても」と「属性修飾」の「なんと」による修飾との違いについても見ておきたい。まず、「とても」は、被修飾語の属性にのみ関与し、その属性が程度スケールにおいて高い程度に位置付けることだけを示す。それに対して、「なんと」では事物の属性の程度が極めて高いと語用論的に解釈されるものの、精密に把握できないままの不明の状態に留まっていることが示される。そのため「とても」は属性が明示されていない場合では使えない。また先述の(22)のように断定でない「ことだろうか」とも共起できない。このことは、

(26) [ {とても/\*なんと} 美しい花] を買ってもらった。

のように、程度副詞の「とても」は命題内部に位置し、属性の程度を限定する機能のみを果たすということだと言える。これに対して、「属性修飾」の「なんと」は事物の属性を修飾するだけでなく、文末まで呼応して文全体で話し手の感嘆を表し、程度性を持っていると同時に話者の命題に対する主観的な見方や判断を表すモダリティ表現の一つと言える<sup>(8)</sup>。つまり、「なんと」は「程度把握困難」というべきモーダルなとらえ方を表し、程度を修飾しながらもその表現が文全体に及び、文末表現との共起制約をもたらす。

### 5.3 事態を修飾する「なんと」

もう一度例(25)を見てみよう。

(25) (再掲) {なんて/なんという/\*なんと} 悲劇だ。

(27) 最近話題となっているあの映画をコメディだと思って見に行ったら、なんと悲劇だった。

前節で述べたように「ストーリーの悲しさ」の程度が甚だしいことを感嘆する場合においては、連体修飾として「なんと」は使えない。しかし(27)のように前文脈を補足し、「あの映画が予想に反して悲劇であること」いわゆる情報内容が意外であることに対する驚きに用いられる場合、逆に「なんて」が使えず、「なんと」のみが言えるようになる。この「なんと」は「悲劇」という名詞を修飾する連体修飾語ではなく、「あの映画は悲劇だった」という命題全体を修飾し、話し手の抱く意外感を示しているのである。これは事態を修飾する用法と言え、「なんと」は基本的に命題全体が話し手にとって非常に予想外であることを意味する表現と考えられる。

この用法の場合、(28)のように、予想外の事態全体が「なんと」の驚きのスコープに含まれ、①②③のどちらの場所にも「なんと」を挿入し、隣接する成分を焦点化して強調することができる。(原文は②の位置に「なんと」)

(28) ①家から流れ出る廃水は、②ビニール管を通って、③家の裏の空き地に掘られた直径一、二メートルぐらいの穴に吸い込まれていくだけだったのだ。 (沼野正子『私の家事物語』BCCWJ)

構文的な独立性から見ると、「属性修飾」の「なんと」は事物の属性に結びついてその程度を修飾する用法であり、修飾対象と緊密な統語関係を形成するため、文中における出現位置も限定される。一方、「事態修飾」の「なんと」はより広く命題全体を修飾対象とし、修飾対象とのあいだにポーズを入れることも可能であり、後続内容の意外性を情意的に強調する機能を持つ。この点において、「事態修飾」の「なんと」は、「属性修飾」の用法に比べて構文的な独立性が高く、副詞的構造を保ちつつも感動詞的機能を帯びた中間的な用法と捉えることができる。

こうした用法の「なんと」は、遭遇した情報が話し手にとって新しいことを前提とする。例えば、

(29) この柿はなんと 1000 円もするのか！

では「柿が 1000 円もする」ことが、話し手の認識では非常に想定しにくい事態であることを「なんと」で示している。また、

(30) そこで、私は「うん、 いらないよ」のつもりで「ウイ、 メルシィ」と返事すると、ママはなんとその肉をカゴに入れてしまった。 (加藤紀子『私にも出来たいくつかの事』BCCWJ)

(8) 工藤(2016)では「なんと」、「なんて」を現実認識的な基本叙法の中の「感嘆・発見」の叙法副詞として分類している。

では日本とフランスの文化の差異によって断わり方が異なることを話し手が把握できておらず、新情報は話者の既有知識と矛盾し、受け入れ難いことを示す。「事態修飾」の「なんと」は「属性修飾」の「なんと」に連続し、意外性に対する情意的な驚きを表示している。ここで共起する事態は情意的な驚きの対象として確定的でなければならず、

(31) \*この柿はなんと 1000 円もする {だろう/にちがいない/と思う}。

のように推量表現と共に起できない。

こうした事態修飾の「なんと」は、さらに対目的用法と対他的拡張用法の二種類に分けることができる。(29)のような用法では「なんと」は独り言的に使われ、話者の遭遇した事態に対しての即時的な驚き・感嘆を示す。これは対目的用法と言える。

一方、これを対他的にして、

(32) この柿はなんと 1000 円もするのですよ。

のようにすればどうだろうか。この用法では、話し手のみの感嘆に留まるのではなく、一步進んで聞き手まで事態の意外性に対する驚きを共感させ、その事態が「話し手にとって意外であるだけでなく、聞き手もそれが予想外のことだと思うだろう」と想定させるような機能を持っていると思われる。いわば、疑似的な感嘆用法に拡張した用法なのである。こうしたことに関連して、本多(2008)が「提示的意味論」を提唱し、例えば「今のは話、実は全部うそだったりして」の「たり」<sup>(9)</sup>のような用法が「事態の生起する必然性がないものとあえて認識して提示することによって、相手にとっての見え方を優先させて、相手の不愉快を軽減する婉曲用法に拡張している」(p8)と述べていることが注目される。ここでいう「なんと」の疑似的感嘆用法も広い意味で「相手にとっての見え方」に関するいわば拡張を経るものである<sup>(10)</sup>。

対目的用法の場合では新情報との遭遇と「なんと」の発話は同時に発生するのに対し、(32)のように対的に使われる「なんと」は厳密に言えば発話時点においてその事態はすでに話者にとって既知の情報で、発話時点と事態遭遇時点とずれていてもよい。いわば、「なんと」を用いて事態遭遇当時のように話者の情動を示すことによって、事態全体あるいはその一部に焦点を当て、感嘆の意を聞き手と共有する用法となっているからである。つまり、自分が驚いた事態をだれかに伝えるという対的な場面において、「なんと」の即時的な驚きの機能は事態の焦点化と驚きの共感に拡張していると言える。

こうした疑似的感嘆用法の「なんと」は物語の語りとしても観察できる。

(33) なんと、死んだ山犬のからだの下から、子犬が顔を出しているのではありませんか。

(山上梨香『むくはとじゅうの名犬物語』BCCWJ)

この場合、場面に関する情報は作者(話し手)にとっては語るべき情報であるが、読者(聞き手)にとっては新情報であることになる。物語の作者は「なんと」の驚き・意外の機能を利用し、特定の場面において必要な読み手にとっての驚きという緊張感を作り出している。これに関連して、意外性を示す副詞で言えば、「意外なことに」、「意外にも」が挙げられる。

(4) (再掲) 司会:「本日は「なんと」/?意外なことに/?意外にも!俳優の〇〇さんに来ていただきました!」

のように、イベントや番組の冒頭で特別なゲストを紹介する際、「なんと」がよく使用される。「なんと」を用いることで、その人物が予想外で特別な存在であることを強調し、聞き手の注意を引き付けつつ、驚きや感動を共有する働きを果たす。それに対し、「意外なことに」「意外にも」にはこのような情意性がなく、話し手との共感を引き起こす機能を持たない。

また、「なんと」のこの用法は、話し手自身の情動とは無関係であってもよく、聞き手が驚くことを予想するだけの用法として使われることがある。

(9) 「たり」の用法については寺村(1991)、森山(1995)、(1997)、中俣(2015)なども参照。

(10) 森山(1989)の談話管理における「演技性」の論述や富樫(2001)の「語用論的フィードバック」の観点とも関連すると思われる。

- (34) 「私は {なんと/??意外なことに/??意外にも}, 十月に結婚するよ！」  
 「えっ、うそ!？」

この例で言えば、「十月に結婚する」ことは話し手にとって自明なことであるが、聞き手にとっては予想外で驚くべきこと、あるいは驚いてもらいたいことである。そのことの標識が「なんと」である。「なんと」は当該情報が既有知識から考えて受容困難であるというまさに「驚くべき」ことであるという情動を聞き手に強調することになる。あえて言えば聞き手に乗り移って聞き手の感嘆を先取る用法と言えることもできよう。

この場合、「意外なことに」、「意外にも」はあまり使われない<sup>(11)</sup>。「意外なことに」は話し手にとっても聞き手にとってもある事態が予想と大きく異なって、意外であるという、普遍的な認識を語彙的に表す表現であるため、自分の情報を伝える場合には普通適しない。もっとも、結婚することが「自分でも信じられないぐらいだ」ということを冗談のように表現する場合、わざと「意外なことに」を使うことはある<sup>(12)</sup>。

このように、「なんと」は話者の情動の表出にとどまらず、聞き手との情動の共有、さらには感嘆の移転へと機能が拡張している。これと関連して、例えば手品の場面で手品師が「では、手を振ると……あら不思議、ウサギが出てきました！」と発話する場合、本来は話者の感嘆を示す「あら不思議」が、観客の感嘆を先取りし、驚きを演出する役割を担う。このような機能の拡張はいずれも、語自体が有する情動性の移転に基づいていると考えられる。それに対し、「意外なことに」「意外にも」は情動性を含まず、事態の内容が予想外であるという評価的意味にとどまるため、聞き手の感嘆を先取る用法への拡張は生じないのであろう。

上述のように、本章では副詞的な用法としての「なんと」について検討し、その用法を広く「疑問」「属性修飾」「事態修飾」という三つに分類した。「疑問」用法は「何+と」であり、一語としての副詞ではなく、言語活動動詞が後続すること、疑問の意味も保存していることなどから、副詞としての「なんと」という語の意味とは区別が必要である。一方で、「なんて（なんという）+名詞」の構造と意味的に関連する側面もある。これは、話し手の既有知識では解明できず、事態が不定・不明であるという点でそれに対する情報処理・言語化ができていない状態を示している。「属性修飾」の「なんと」は形容詞・形容動詞を修飾し、特定属性の程度性を程度スケールに位置付けることができないという「程度把握困難」を表すわけであるが、その基本的なメカニズムはやはり共通している。属性概念の程度性があまりにも高いことを情意的に受け入れがたいこととして感嘆的に表現することで強調するからである。また事態を修飾する「なんと」も同じく当該事態が話者にとって受け入れ難い情報であるということから意外感を強調するのである。これは最初に検討した独立用法の感動詞としての「なんと」にも共通するところである。

なお、事態修飾の「なんと」が対自用法と対他用法の二種類に分けられる点も重要である。後者は「疑似的な感嘆用法」とも言え、事態全体あるいはその一部に焦点を当て、感嘆の意を聞き手と共有する。こうした事態の焦点化と驚きの共感の機能がさらに語用論的に広がり、単に相手に情報を伝達する際に情報の意外性を強調するのに使われるようになっている。

## 6. おわりに

以上、本稿では、現代日本語における「なんと」を感動詞としての「独立用法」、副詞的用法としての「疑問」「属性修飾」「事態修飾」用法といった四つの用法に分類して考察を行った。本来の「何+と」という疑問の形から想定できる、意外性による「情報受容困難」という意味が根本に位置づけられる。こうした情報処理上の意味は「なんと」の各用法に共通している。この情報受容困難という中核的意味は意外性による感嘆でもあり、感動詞として独立的に使われて話し手の情動を表出することはもちろん、文の中に位置し、属性概念や事態内容を修飾する場合においてその評価的な機能を果たしている。その意味では感動詞と副詞としての意味用法は連続していると言える。加えて、「事態修飾」の「なんと」が文中から離脱し、発話冒頭に単独で用いられる

(11) 日本語母語話者4人による容認度の判断を行った結果、3人は不自然、1人は自然と判断した。

(12) 中国語では、「意外なことに」「意外にも」に当たる表現として、【意外的】、【出乎意料的】などが挙げられるが、自分のことを伝える場合には使えない。

場合や、対他的な疑似的感嘆用法へと拡張される場合には、感動詞的な性質がいっそう強くなる。こうした用法の展開は、「なんと」が統語的特徴および語用論的機能においても、品詞間の連続性を示す語であることを示唆していると考えられる。

本稿の「なんと」という形式に焦点を当てた議論は Mirativity (意外性) の議論にも深く関連している。Aikhena (2012) はさまざまな言語における意外の意味を表す言語形式を取り上げて意外性と証拠性の意味範疇について論じている。意外性、感嘆性、証拠性、疑問のとらえ方はさらに他の形式や構文とともに一般化していくことが考えられる。さらにこうした形式に相当するものがほかの言語ではどうなのかを幅広く検討していくことも必要である。

また類似の表現として、手品やナレーションの場面で使われる「あら不思議」という表現が挙げられる。この場合、「あら不思議」もまた「なんと」と同様に、話し手が聞き手の感情を代弁する役割を果たしているように思われる。そのほか、「なんとも」など「なんと」とかかわる周辺的な表現や、「なんとまあ」のようなほかの感動詞との共起の用法なども興味深いことである。そうしたさらなる発展課題については稿を改めて論じることとしたい。

### 参考文献

- 安達太郎 (2002) 「現代日本語の感嘆文をめぐって」『広島女子大学国際文化学部紀要』10, pp.107-121, 県立広島女子大学.
- Aikhena, Alexandra.Y. (2012) "The Essence of Mirativity," *Linguistic Typology* 16, pp.435-485.
- 大鹿薰久 (1988) 「感動文の構造一句と文についての把握ー」『ことばとことは 第五集』 pp.96-101, 和泉書院.
- 大鹿薰久 (1989) 「感動文の構造 (承前) 一句と文についての把握ー」『ことばとことは 第六集』 pp.77-82, 和泉書院.
- 尾上圭介 (1986) 「感嘆文と希求・命令文—喚体・術体概念の有効性ー」『松村明教授古稀記念国語研究論集』 pp.555-582, 明治書院.
- 尾上圭介 (1998) 「一語文の用法—“イマ、ココ”を離れない文の検討のためにー」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 pp.888-908, 沢古書院.
- 工藤浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房.
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』岩波書店.
- 笛井香 (2006) 「現代語の感動文の構造—「なんと」型感動文の構造をめぐってー」『日本語の研究』2 (1), pp.16-31, 日本語学会.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 pp.257-279, くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味III』くろしお出版.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, pp.19-41, 筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室.
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』ひつじ書房.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2005) 『日本国語大辞典 第二版』第十巻, 小学館.
- 本多啓 (2006) 「認知意味論・コミュニケーション・共同注意—捉え方 (理解) の意味論から見せ方 (提示) の意味論へー」『語用論研究』8, pp.1-13.
- 深津周太 (2018) 「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法—感動詞化の観点からー」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』 pp.41-55, 和泉書院.
- 深津周太 (2020) 「狂言台本における意外性標識—疑問詞「何」に基づく語文的表現の実態ー」『静言論叢』3, pp.1-16.
- 松村明 (編) (1995) 『大辞林 第2版』三省堂.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』01, pp.63-88.
- 森山卓郎 (1995) 「並列述語構文考—『たり』『とか』『か』『なり』の意味用法をめぐってー」『複文の研究』 pp.127-148, くろしお出版.
- 森山卓郎 (1997) 「うどんにマヨネーズかけたりして」『月刊言語』26 (2), pp.56-61, 大修館書店.
- 森山卓郎 (2015) 「感動詞と応答—新情報との遭遇を中心にー」友定賢治 (編) 『感動詞の言語学』 pp.53-81, ひつじ書房.
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院.
- 山田忠雄ほか (2005) 『新明解国語辞典 第6版』三省堂.
- 姚瑤 (2021) 「「あ」系感動詞における語の認定について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66, pp.209-220, 早稲田大学大学院文学研究科.